



## ② 尾駁の牧

# やませ馬産に適した風土



相内 知昭

太平洋に面し、やませの影響で夏でも冷涼な六ヶ所村尾駁地区。かつてこの地を含む小川原湖北岸の六ヶ所台地に、名馬の産地として名高い「尾駁の牧」があったとされる。



「発茶沢遺跡」から発掘された平安時代中期の住居跡を復元した建物。竪穴の竈の外側に掘っ立て柱建造物跡が接続しているのが特徴。右側の竪穴部分が住居部分。掘っ立て柱部分は馬小屋などに使用されたと思われる  
＝六ヶ所村立郷土館

## 天下に名高い荒馬を生産

た。京の貴族たちにとって名馬は、権力財力の象徴であったため、特に荒馬が必要とされていた。天皇が臨席する「競馬(くらべうま)」の儀式等において活躍していたと考えられる。

文献学的に初めて「尾駁の牧」が登場するのは、鎌倉初期に成立した順徳天皇勅撰の『歌の百科事典』ともいわれた歌学書『八雲御抄(やくもみしよつ)』である。同巻五「名所部」牧の項に、信州地方にあった著名な「望月の牧」や「桐原牧」と並び称されている。

既にこの時期には、鎌部の地(若手県北から下北半島を含む青森県東部地域)において一戸(九戸、東西南北の四門に分ける、「戸立(産)制」の行政区画が成立していたと考えられており、尾駁の牧はこの鎌部の地の前身の「御牧(おんまき)」だったと思われる。

鎌倉初期の歌人で藤原定家と並び称された藤原家隆が次の歌を詠んでいる。野辺見れば、まだ名に負われぬ、桜麻の、尾駁の駒の、雪のむらぎえ、もうその頃には、歌人仲間でもあまり有名でなくなってきた尾駁の駒を、「自分はまだ、しっかりと忘れないでいるぞ」と自負心より詠んでいることから、この地に尾駁の駒があったことが推測できる。

2012年、六ヶ所村で「六ヶ所村歴史フォーラム2012」が開かれ、松本建速東海大教授



冷涼な環境のため、畜産に適している六ヶ所村。現在は牛を放牧しているが、かつてこの地一帯は天下に名高い「尾駁の駒」を生産していたとされる＝村営二又放牧場

(日本考古学)によると、同地域は、火山灰由来の黒ボク土の土地にやませが吹く、馬産に適した風土だったとされる。尾駁沼近くにある発茶沢(はつちやざわ)遺跡の竪穴式住居付属建物跡は「厩(うまや)」であると想定。同遺跡の竈(かまど)が、古代の官営の牧があった信州地方の馬飼の人たちと同じ「石組みの竈」であったという特徴から、古代日本国中央の馬飼の人々の末裔(まつえい)が移住してきたのではないかと、この仮説を立てた。

また、その付属建物の数が少ないことから、「単なる耐雪用の建物とは思えない」とし、「多雪を立たせ、特別な馬を飼うために建てられた施設だったのではないかと」も言及。そうした知恵を知る人々が六ヶ所に移り住み、尾駁の駒を育てていたのでは、と推測している。

陸奥国では、豪族が台頭してきた10世紀後半から、毎年数頭を京に送る「陸奥国交易馬制度」が始められ、朝廷が、馬を税として徴収するのではなく、買入れしていた。こうした交易を通じて豪族たちは次第に力を付けていったとされる。

▼交易馬御馬使  
「陸奥国交易馬制度」夷狄(いいてき)未開(みかひ)の地より、良馬の入手の管理統制の一つとして、交易馬が成立したと考えられている。天皇の直轄の御牧(おんまき)勅旨牧(ちやくしまき)からの貢馬数の減少に伴い、10世紀後半から恒例化し、交易馬御馬使が成立した。陸奥守任期中、一度は貢馬することになり、また10世紀末頃にはその制が整ったとされ、11世紀前半には、交易馬数は20疋(ひき)頭、藤原頼通政権時には30疋に固定化されたと推測されている。

陸奥守・源頼義は、現在の若手県中腹にあたる「奥六郡」の豪族・安倍頼時を平定するため、下毛野興重(しもつけのおきしげ)を派遣している。下毛野は交易馬御馬使としても活躍していた朝廷の下級官僚だったと思われる。「奥六郡」の北方、現在の北上・下北郡内を領していた安倍富忠を、頼時から離反させ、挟み撃ちしようとしたのである。しかし、頼時は、富忠の離反をひるがえすため、わざわざ2千の兵を連れて奥地まで説得に赴いている。富忠は、それほどの実力者であったのだ。馬の交易によって強力な財力を築いていたと考えられる。

結果として、頼時はその説得に失敗し、返り討ちに遭い命を落としてしまふ。後に源氏は、この鎌部の地を直轄領とするべく、権謀術数を練っていくこととなる。(あいない・ともあき Ⅱ「尾駁の牧」歴史研究会会長、六ヶ所村在住)

毎月第2、4木曜日に掲載